

22) 東洋医学臨床治療における陰陽虚実

Yin and Yang, Hyperfunction and Hypofunction for Clinical Treatment of Oriental Medicine

鶴見大学歯学部歯科麻酔学教室 ○戸出一郎, 三浦一恵, 山崎ひろ子, 深山治久

Ichiro Tode, Kazue Miura, Hiroko Yamazaki, Haruhisa Fukayama, *Department of Dental Anesthesiology, School of Dental Medicine, Tsurumi University*

2004年6月より、鶴見大学歯学部附属病院では、歯科東洋医学専門外来を設け、西洋医学では根治し難い疾患患者を主たる対象として、東洋医学による診療を行い、見るべき効果を挙げている。

本日、此处に報告するのは、我々が東洋医学の根拠としている基本的な病理論の大綱である。これは2千年の長い歴史を経て培われてきた東洋医学独特の理論であって、西洋医学とは全く異なった理論体系を持っている。

この体系は一言で言えば、所謂「内経医学」と称される医学の中心を構成する理論であり、現代まで約2千年の間に発展し、定着した病理論である。

文献として当時の面影を今日に伝えるものは「素問」「靈樞」「傷寒論」であり、更に診断学として「脈経」が加わっている。これらの古典は約2千年の歳月を経ているが、今日見ても優れた理論と臨床効果を持っていて、驚くことが多いのである。それゆえ本会において東洋医学の基礎的概念を報告し、諸賢のご批判を賜りたいと考える次第である。

中国よりわが国に伝わった伝統医学は、経絡を軸とし、陰陽五行説に基づいて展開される医術である。今、ここでは経絡説には触れないで、まず陰陽説の基本から報告したいと思う。東洋医学の病理論は、陰陽虚実の診断を基本として分類されるもので、あらゆる疾病はこの分類の範疇に集約される。

陰陽虚実とは、病証の診断上、証（病状）判定の基本的区分を表現する代名詞であり、陰と陽は、病人の個性的体質や病状の性質を表現し、虚と実とは、邪氣や病原菌に抵抗しうる病人の精氣や体力盛衰の量的多少を表現する符号である。

<臨床>

一般に疾病に侵される原因は次のようである。

1. 薄弱な稟質、素質的なもの。
2. 内因的条件によって損傷を形成するもの。
3. 風・寒・暑・湿などの外因によるもの。

疾病の分類は、病位に陰或は陽があり、病証に陰証・陽証があり、また病邪の質と量において虚証と実証とがある。したがって疾病は陽実証・陽虚証・陰実証・陰虚証の四型に大別される。

<陽証>

病証 発熱、力ある浮脈、数脈、面赤、痛みが激しい、痛所が動く、冷たいものを好む等。積極的病状、或は外因の熱性病状を指す。

病状が陽証にして実証＝陽実証

病状が陽証にして虚証＝陽虚証

病位 腑・表・氣・陽經の病変。

病位がこれらに属する実証＝陽実証

病位がこれらに属する虚証＝陽虚証

<陰証>

病証 熱が低い。脈は沈或は遅で、力がない。面青、或は白、元気がない。痛みが激しくない。温を好むなど消極的病状或は寒性なる病状を指す。

病状が陰証にして実証＝陰実証

病状が陰証にして虚証＝陰虚証

病位 臓・裏・血・陰經の病変。

病位がこれらに属する実証＝陰実証

病位がこれらに属する虚証＝陰虚証

<実証>

実とは病邪の氣が盛んで充実したという意であって、風・寒・暑・湿等の外因の邪氣や、喜怒憂思悲恐驚等の内傷性の邪氣が充実しているという意味であり、またその症状を指す。一般的に積極的激症となり勝ちである。

<虚証>

虚とは正氣の虚乏した状態を言うのであって、臟腑経絡にめぐる三焦の氣が衰えることにより、

病邪に対する抵抗力の減退，すなわち元気の虚損を云う。不摂生・過労により緩慢な進行をたどって慢性症状を呈する。

＜診断＞（脈診）

内経医学では脈の大綱を浮沈遅数滑濇大緩の8項に分類している。その意味は、浮あるいは沈なるかによって病の表か裏かを分かち、遅あるいは数なるかによって病の寒たるか熱たるかを分かち、滑あるいは濇なるかによって気血の虚或は実なるかを察す。大あるいは緩なるかによって病の

予後・安危を察す。

上記の脈状は病の病因・病状をそのまま表すもので、治療に当っては脈状にしたがって鍼の刺入部位・深淺・遅速を定めなければならない。

鍼灸治療は原則的に、虚証のものには補法の手技を用い、実証に対しては瀉法を用い、病の浅い場合は浅く刺し、病の深い場合には深く刺す。そして熱あれば速刺速抜、寒証ならば置鍼を施すのである。